

第3学年国語科における「意味と内容」の広がり

3年C組 担任 竹光 眞佐人

—「モチモチの木」の学習を通して—

1. 子どもに対する願いと学習指導のねらい

(1) 単元設定の理由 —1年間を通しての取り組みをふまえて—

本学級の子どもの姿をもとにして国語科の課題を考えると、自分なりの考えを持つとともに、進んで話し合いに参加し、互いの考えや思いをしっかりと出し合い伝えあう中で、考えを認め合いながら思考を練り上げていくことが重要ではないかと考えた。そして、その学習課程で理解を深めたり広げたりするために「比較」を多用し学習を進めて行くことが有効ではないかと考えて取り組んできた。

「つり橋わたれ」の学習では多様な思考を促す目的で、主人公や登場人物とのやりとり(言動)を取り上げて比較することで、表層レベルで交わされる直接的な行為とは裏腹に深層部で思い願う気持ち等を子供達なりに考えさせた。つまり、「行動面と心情面」や「自分と相手」「行為の前後」という関係を比較する中で、言葉の持つ「意味の二重性」や「多義性」ということについて学習してきた。また、登場人物間の「関係」(つながり)の変容を一つの視点として考えさせる事で、自分自身への振り返りや社会性の発達を考慮したレベルにまで昇華させることが出来るのではないかと考えて種々の課題を盛り込みながら学習してきた。

登場人物の人柄や心情を捉えるという学習について言うなら、登場人物の言動をもとにして人柄や気持ち(心理状態)を想像する事は言うまでもなくその延長線上に位置する心の変容についても重要であると求めてきた。

次に、「五感を意識した学習」という視点から述べる事にする。3年生になってからの物語文の文章理解に関する学習を簡単に記すことにすると、「きつつきの商売」では、特に「音」について学習を進めてきた。「コーン」というきつつきの出す音。そして「シャバシャバシャバ」「パシパシピチピチ」等の森と雨が奏でる音から様々な情景を想像させたり、音声表現の楽しさにも触れさせたりしながら学習を進めた。また、文章理解と同時に自分の感じた雨の音を直接的かつ間接的に文章化し、「自分が作った音」について説明を加えるという学習も同時に行ってきた。

次に、「つり橋わたれ」では、「ゴーゴー」「さやさや」等の谷川やつり橋や山の木の様子を表す文章表現からも情景を豊かに想像する事や、そこに置かれている登場人物の心情を読み取るための補助的な手だての一つとして活用した。

これらの事から、物語文の学習を考えるなら、文章の意味を知るために言葉や文字を正しく知ることを基点とし、自己の生活経験にも照らし合わせ、文章を基にイメージを豊かに自分なりの読みを展開させたいと考えてきたのである。それは、物語文による疑似体験過程の中でその内容(登場人物の言動)に感動や共鳴することで自己の考え方や生き方に影響を及ぼすような深い読みの出来る子や、物事に対し心豊かに感じ、豊かな表現の出来る子、を育てていきたいと考えて実践を積み重ねてきた。

(2) 単元について

本単元では、年間の取り組みを考慮しながら、「じさま」との関わりの中で豆太の「モチモチの木」に対する心情や行為を比較しながら読み深めていきたいと考えた。そして、霜月二十日の夜中に豆太がとった「行為(勇気)の素」について文章をもとに多様な考えが出せるよう指導したいと考えたのだ。

そこで、まず「モチモチの木」に対して、豆太は、昼間「やい、..実い落とせえ。」と言っているのに対し、夜になると「そっちを見ただけでしょんべんなんか出なくなる。」等の昼夜での豆太の気持ちの違い等を取り上げることで豆太像を子供達が身近に感じられるように学習した。

また、表記内容についても「臆病豆太」を文面通りに鵜呑みにしていいのだろうか、勇敢にも死んでいった父親や、今でも元気に山を駆け回り猟をしているじさまとの比較から出た言葉であるのだろうかということなど、「臆病」や「甘えん坊」についても、一語で言い切るのではなく色々な言葉を当てはめて考えさせてきた。同じように、「五歳の豆太」についても「五つにもなった」と「まだ五つ」という比較も駆使しながら人物像についても多様な観点から迫らせた。

次に、「じさま」についても「どんな小さい声で言っても」起きてくれる行為の理由は「一枚しかないふとんをぬらされちまう…」からなのか、それともそれ以上に豆太が「不憫」なのか「とってもかわいい」からなのか等、じさまの豆太に対する「愛情の証」とでもとれるような言動を取り上げる事で、行為の奥に潜んでいる豆太への思いについても多様な考えを持たせてきた。

次に、「(モチモチの木)」に対しても昼は豆太に強がりと言わせ、秋には木の実を落とし潤いを与える木でもある。逆に夜は「おばけ」って豆太を脅かしてしまう木でもある。この様に二面性を持つ存在でもあり、それが、豆太の「心の強さ」や「自立」という点において成長具合を見るバロメーター(心の強さの物差し)でもある事に気付かせたいと考えて実践してきた。

さらに、物語のクライマックスとなる麓の村までかけていく豆太に対しても「優しさ」や「勇気」という言葉で、その理由を簡単に言い切ってしまう事のないよう「やさしさ」の中身についても多様に考えさせてきた。それは、いつも優しくしてくれているかけがえのないおじいさんに対する気持ちや勇気ある行為となって豆太をそうさせたのだらうし、「じさまの死」よりも「夜の暗さ」を選び、じさまを救うべく一心に麓の村まで走り切ったのだらうし…等、豆太の行為に対し文章を根拠に多様な考えを持たせるとともに、個人の考えをしっかりと発表させ全体の場で練り上げていきたいと考えた。

最後に、「モチモチの木」ともる灯」を見ることが出来たのも、豆太がそれを見ることを望んだと言うより、じさまに対する「無償の愛」が原動力となったて出た「勇気」「やさしさ」という行為の結晶ではないかということ子供達なりに感じさせたい。また、じさまが元気になったその夜から夜の小便にじさまを起こす以前と変わらない豆太に3年生なりの感動や共感を持って読ませたいと考えたからだ。

また、斉藤隆介の作品を読み進めることで、作品の持っている自分の命を顧みずに相手のために力を尽くした「自己犠牲の上に成り立った相手に対する(優しさ)行為」に対し、子供達なりにテーマを色々な言葉や絵を通して感じ取ってもらいたいと願った。

このように、一つの事柄について「一義的」な理解にとどまるのではなく、多義的かつ多様な意味の理解を促したいと考えた。また、逆に斉藤隆介の多くの作品を読み進めることで作品全体に流れている作者の「思い入れ」の様なものを感じる事が出来てほしいと願ったのである。

2. 3年生の子どもがとらえた「意味と内容」

子供達にとっては「豆太」について自分や弟妹との比較の中で身近な存在として受け止めていたようである。子供達は「夜中に外にある雪隠まで行けない。」と言う事や、「昼間はモチモチの木に対し威張っているくせに夜には怖がっている豆太」と言う事等に対し親近感を持って見ている。

また、霜月二十日の夜中の出来事では、なぜ夜に外に出ることすら出来ない豆太が、真夜中にもかかわらず半道もある医者さまの家へ呼びこられたのかという行動の原動力「気力(優しさ)」についての疑問が多数出た。

そこで、課題をまとめてみると ①豆太について ②モチモチの木について ③じさまについて ④「やさしさ」や「勇気」について の4つに課題が集約された。

①については「豆太ほど臆病なやつはない…」の「臆病豆太」と表題にも記しているが五歳という事からすれば当然なのになぜだろう。という豆太の人物像が課題となった。

②については、モチモチの木について、ただ生えているだけの「モチモチの木」に対して静的な木という見方と、豆太の精神に対し色々な作用を及ぼす動的な木という見方をしている子や、題名にもなっている木という事からもその重要な役割についても課題が多く出された。

③については、じさまは豆太の小便につきあう優しさがあり、今でも岩の飛び移りが出来る様な元気で勇敢な人ということから、豆太に対する気持ちについての課題が出た。

④「人間、優しささえあれば…」のところから、「やさしさ」「勇気」についての疑問や、二語の関係が課題となった。このように、子供達は物語の内容について様々な課題を持った。

3. 「意味と内容」がひろがる場面

(1) 「臆病豆太」について

物語の文面では「おくびょう豆太」と言う表題がついてあり、「まったく、豆太ほど臆病なやつはない。…」という言葉で始まっている。しかしながら子供達はこの文面に立ち止まり、「本当に臆病なのか？」と言う事を課題に設定し読み進めていく事にした。

また、文章を根拠に、豆太像に対して自分たちの考えを深めていくきっかけともなった。

「豆太」は本当に臆病か

ぼくは豆太について臆病ではないと思います。それは教科書には「まったく、豆太ほど臆病やつはない。」と書いているけど、モチモチの木さえなかつたら一人で雪隠まで行けるし、甘えん坊な子だと思いました。臆病なのと違って甘えん坊な子です。

「豆太」は本当に臆病か

ぼくは臆病じゃないと思います。理由はおとうもじさまもきもすけだったけど、豆太は普通だからおとうやじさまと比べるのはちょっとかわいそうな気がします。もし、じさまもおとうもきもすけじゃなかつたらこんな事は言わなかつたらと思う。

「豆太」は本当に臆病か

五つになって雪隠に行く事はじさまから見て当たり前の事だと思います。どうしてかという「六十四の今でもまだ青じしを追っかけ肝を冷やすような岩から岩への飛び移りだつて見事にやっつけてのける。」肝助だからです。だから、じさまにとって豆太は強くないとダメだと思います。おじいさんは豆太に強くなってほしいんだーと思いました。

「臆病豆太」について考える中で、「甘えん坊さんだから本当は行けるかも知れないけどじさまに甘えている。」捉える児童や「五歳だから一人で行けなくて当たり前。」という自分の兄弟や自分自身と比べて無理なのはしようがない。という考えが出た。また、「臆病というのは熊と組み討ちして死んだお父さんや、今でも青じしを追っかけているじさま本人と比べているからそんな事言えるんだ。」という考えや、おじいさんの豆太に対する願いが込められていて「お父さんや自分みたいに強い山の男になってほしい。」という気持ちではないかという考えが出た。

このように、「臆病」という語句に立ち止まりことで、文章に立ち返って考えるのはもちろんの事、自分の経験をも織り交ぜて考える事が出来た。また、本文とは逆に「臆病じゃないぞ」と考える事で多様な考えを産出する事が出来た。これは、文章を表面的に捉えて鵜呑みにするのではなく、一度自分なりに解釈した後、思考の視点を変えてあらためて考えなおした結果の賜であると考えている。また、じさま側から見て「勇敢なじさま本人と比べると臆病と言う言葉が当てはまりそうだな。」という多面的な見方が出来てきている。また、勇敢になってほしいと願うじさまの心が「豆太ほど臆病なやつはいない」と言う表現となったのではないかという広がりも見せた。

事件が起こるまでの豆太を中心に話し合いを進めたが、霜月二十日の事件時の豆太の行動をも視野に入れて考えを構築していく大きな足場となっている事も否めない事実である。この話し合いにより、より一層「霜月二十日の夜中の豆太」の行為の不思議さがより深まった。

(2) 「昼の豆太と夜の豆太」について

昼と夜の豆太を比較して豆太の人物像に迫った。モチモチの木に対し「威張っている豆太」「怖がっている豆太」を昼夜の対比から考えさせた。「夜のモチモチの木が怖いから昼間は怖がった分威張っている。」や空威張りする豆太像に自分を重ね合わせることで、より親近感や共感を持つこととなり、豆太を子供達の身近に引き寄せる事が出来たようだ。

「昼と夜の豆太」

昼の豆太は「やいまい落とせ」と偉そうに言っているけど、夜になると態度ががらっと変わってしまって泣きそうになってじさまに「しっつ。」て言ってもらわないとおしっこも出来ない弱虫になってしまいます。昼と夜とではとっても違った豆太になります。五歳だから仕方ないかなんて思います。

また、「モチモチの木」に対しても、夜は怖い存在で豆太を心理的に脅かす木ではあるが、秋には、おいしい「実(もち)」を豆太に提供する木となり生活の中では無くてはならない存在でもある事を認識しはじめた。また木の役割として、「ただの木」ではなく「母親」として姿を見いだしてきた。というのは、「モチモチの木」は豆太の「弱い心(臆病)を鍛える」とともに、「おいしい食べ物を提供」しながら豆太の成長を厳しくそして優しく見守っている「大きな存在」としての考えを持ち始めたのだ。

つまり、夜に一人で雪隠に行きモチモチの木を怖がらずに見る事が出来るという事は豆太が一人前に成長した証ではないかという考えである。

この様に昼夜の豆太を考えていく事により、その人間性に共感を持つとともに木に対してもただ無表情・無機質な存在ではなく、何か一つの役割を担って豆太に「やさしく・厳しく」働きかけているような木であるのではないかという考えも持てるようになってきたのである。

(3) 「宵の口から寝た豆太」について

「霜月二十日の晩の話を書いて豆太は宵の口から寝てしまった。」という文から、「なぜ、この日に限りいつもより早く寝たのか？」という課題で豆太の「心情」を中心に話し合った。

「考えないように早く寝た」

おじいさんもお父さんも見たのに、自分だけ見られないのは嫌だから忘れたいという気持ちで早く寝ようと思ったのだと思います。だって一人だけ勇気がないのも辛いし、一人だけ見た事がないのも辛いし「昼間だったら見たいなー」いう事で頭の中を真っ白けにして何も考えないようにしてモチモチの木のことは忘れるように早く寝てしまったんだと思います。

「少し悔しい気持ちで早く寝た」

豆太の心の中は、「あー、本当は見たいけど、夜は怖いから……。」と思っているからちよつと悔しいから宵の口から寝たと思います。そして、もう一つの心の中は「見たいなあ、どうしても見たいなあー、でも、夜は怖いなあ。」と考えているだけで怖くなって寝られなくなってしまうのじゃないかと思って、「じゃあ、もう寝よう。」と思ったからだと思います。それと、死んだお父さんも見たいし、じさまも小さい頃見たんだったら自分も見たいと思ったんだけど「やっぱり夜は怖いなあ。やっぱりおらも見たいなあ。」と思ったんだけど「もう、怖いからやめよう。」と宵の口から寝たと思います。

「見やされたら怖い」

じさまが「今日はモチモチの木に灯がともる晩だ。」と言い始めているし、おじいさんもお父さんも見ているから、おじいさんは豆太も見られるだろうなあと思っているから、夜に豆太を連れて行って「どうだ、豆太、豆太にはこのモチモチの木に灯がついているのが見えるかー？」などと外に出されたら嫌だから早く寝たと思います。

大別すると、以上のような3つの考えが出た。そこで豆太の日常の言動をも考えながら「早く寝る」という豆太の心情についてこれらの考えをもとに話し合いを行った。この学習については、「宵の口から寝る豆太」の心理状態を文章を根拠に分析させることで多様な考えを持たせたいと考えたからだ。

結果は、豆太の「とまどい、悔しさ、弱さ(臆病さ)、願い、期待、不安、等」の言葉に内包されるように、じさまや父親の肝介であり、それに対して「自分は不甲斐ない」という豆太の感情まで想像するような広がりを持つ事が出来たのだ。

前時の「豆太は臆病か」に続いて本時の学習も次時の「霜月二十日の事件」における「豆太の勇敢な行為の素」につながる大切な伏線にもなるであろう事は言うまでもない事である。

(4) 「豆太の心のエネルギー」について

臆病だと思われていた豆太が医者さまを呼びにふもとの村まで走り下りる事が出来た「原動力」に関して「エネルギーの素(種)」について話し合った。これは、本文では「優しさ」「勇気」という二語で締めくくられているが、これらの言葉で一連の行為を言い放つのではなく、子供達なりに自分の言葉に置き換えて表現させたかったのである。この学習が語彙の獲得に始まり物語のテーマ理解へと深まりや広がりを見せる手だてとして取り組んだ。

「じさま思い」 じさまを思う気持ちが強いからです。は豆太はいつもじさまにかわいがってもらっている。とっても大切に大好きな人だから。
「じさまを大切に思う気持ち」 じさまが豆太を大切に思うように豆太もじさまをとっても大切に思っていた。人を大切に作る気持ちが花火みたいにどーんと打ち上がった。

「恩返し」 色々豆太のためにしてくれたじさまに対して恩返しをしたい。そのじさまを思う気持ちが助けたいという気持ちに変わっていった。

「じさまを(大切に)思う心」「守りたい」「助けたい」という言葉とともに「恩返し」「自分の出来る精一杯の事をする」という考えや、その行為に対して「勇敢」という言葉を当てはめて説明する児童も出てきた。この話し合いの中でまとめ段階では「昼・夜」(昼は強がりだけど夜は臆病)という対比を「生・死」に当てはめて「昼=生」「夜=死」と考えて、その怖い夜をも打ち破ってじさまを助ける為に行動する強い心を持っているという考えを産出するに至った。この行為の「エネルギーの素」を子供達なりに考えて分析を加える事で物語のテーマに迫ることができたと考えている。

4. 成果と課題

本単元では、物語文理解において、比較を学習手段として多用する事で言葉の持つ「多義性」や行為の「二重性」についても多様な考えが持てるよう学習を重ねてきた。登場人物像理解においても本文の「語」を基に自分なりの考えを持ち自分に合った言葉でそれを説明していけるようになってきたと考えている。また、斉藤隆介作品を多数読み進めていくうちに作品の意味する「テーマ」を彼らなりに把握できたと考えている。また、作品のテーマにもなっている「やさしさ」を作品ごとに分解し、主人公の行為の裏にある思いを彼らなりに分析や分類が出来たようにも考えている。

今後の課題としては引き続き、物語全体を見通す中で「言葉」の持つ重要性を踏まえた上で文章理解を促したいと考えている。また、その表現においても、「嬉しい」「悲しい」と言うような一言二言の単語で片付けてしまうのではなく、自分なりに適当な言葉を選び、用いる事で多様かつ豊かな表現が出来る子に育てたいと考えている。また、登場人物理解について「自分と登場人物」「登場人物間」の関係において考え方や生き方を比較しながら人物像やテーマに迫る手だてを講じていきたいと考えている。

これらの課題実現のためには、今後もさらに、子供自身が先ず根拠を持ち自分の考えをしっかりと確立し表現する事。そして、集団の場で友達と考えと十分に交流させる中で聞き比べながら自分の考えをより確かな理解として構築させていくという相互の「思考の練り合い」が重要であるとと考えている。

またその練り上げられた思考を基に、より高次の思考へと発展させていきたいと考えている。